実用スペシャル

吉祥を知り幸運をまねく暦の使い方

「暦」で運勢を読む!!

暦には、実に多くの運命の秘密が封じ込められている。なぜなら暦は、陰陽道の秘儀・秘占を現代にまで継承する叡智の結晶だからだ。人間の宿命・運命を変え、よりよく生きるために暦を繰ってみよう！

文＝大宮司朗
イラストレーション＝五十嵐晃

日々の吉凶を教える暦占の秘密

時の流れを区切るテクニック

暦には、一年間の四季・月・日や行事、祝祭日、日々の吉凶など、実に多くの事柄が記載されている。それらひとつひとつに固有の歴史や由来があるのだが、詳細は後述するとして、もともとの暦はきわめて単純だ。

辞書を引くと、暦は「日読（カヨミ）の意」とある。これは、日の連なりを1日、2日、3日……と数えることを意味している。今日は1日、明日は2日……と、現在を確認することが暦の出発点なのだ。

現在を確認するという単純なことから出発し、そのうえで季節の循環を正確に把握し、時の流れを区切っていく。そのために太陽や月、星、あるいは自然の移り変わりを観察し、体系づけていくテクニックが発達した。その集大成が現在の暦ともいえる。

時の流れを年や月、週、日と区切っていくテクニックを「暦法」というが、これはごく古い時代から行われていた。5000年前のエジプトではすでに「シリウス暦」が使われ、バビロニアでも4500年前ごろから「太陰太陽暦」が採用されている。

はるかな昔から、人類は時の流れに執着し、暦という形あるものとして表してきたのだ。

なぜ人類は、それほど時の流れにこだわったのだろう。ひとつには、生活上での利便性がある。

暦とは一種の未来予知のタイムテーブルだ。たとえば日本でいうと、春になれば籾をまき、秋になれば刈り取りをする。その時期は、暦によってあらかじめ知ることができる。暦に従ってやっていけば、まず間違うことはない。そういう意味での利便性。

しかし、ただそれだけではない。もうひとつ暦には、時間というものに縛られた、人間存在の業を見出すことができるのだ。

人間は生まれたら没するという宿命の下に生きる存在だ。考えてみると、死ぬために生きるという"はかなさ"がある。しかし、だからこそ、生きている一日一日を大切にし、生命を生かしきって有意義な生を送りたいと思う。

暦には、時間に束縛されたこうした人間の運命を、いかにしてよりよく拓いていくかという叡智も込められているのだ。それが「暦の占い＝暦占」というテクニックで導かれる日々の吉凶である。

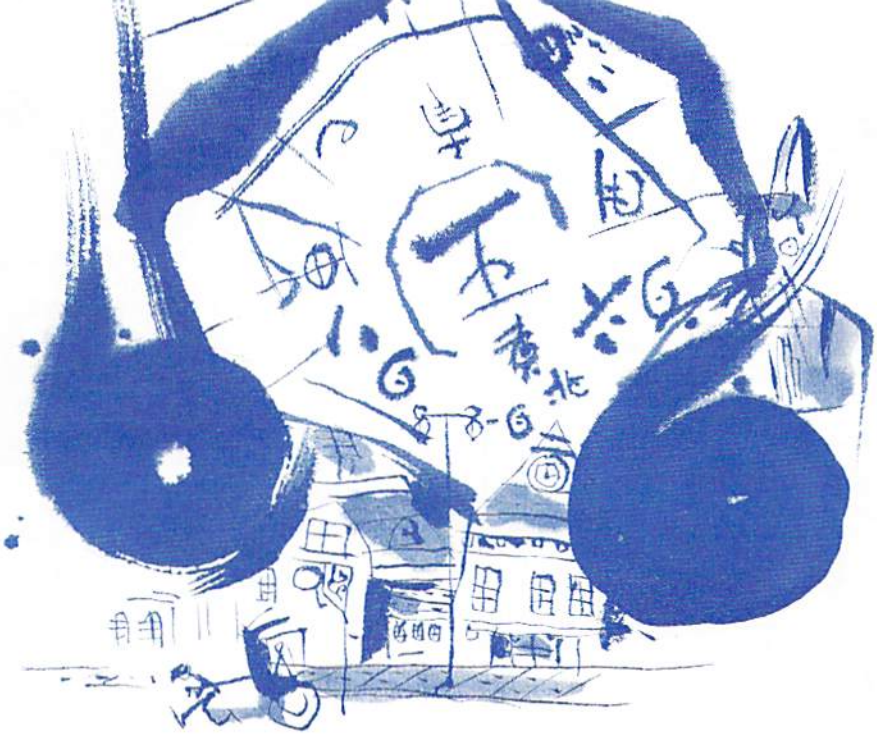
おばけ暦がはやった理由

暦占とは、人間の持つ宿命・運命・運勢をうまく使い分け、人の運を活用するための方法である。この暦占の驚くべき特徴は、運に作用する要素を一年365日にわたって見極め、詳細に導きだしている点にある。

暦には毎日の変化吉凶が記してある。俗に「暦注」と呼ばれているものだ。この暦注を導きだす手法が暦占なのである。

古人は、暦占によって導かれる毎日の変化吉凶を上手に使っていくことで、時の呪縛から逃れ、運命・運勢をよりよい方向に導こうとした。毎日の暦注は、手軽にその要望に応えてくれるものであったのだ。

暦にとって、この暦注は欠かせないものだ。その証拠に、現在はもちろんのこと、過去においても、暦注を廃した暦が長く通用したこ



とはない。

明治時代に「おばけ暦」が大いにはやったことがある。

日本では、明治改暦（明治6年1月1日）によって初めて太陽暦が採用され、飛鳥時代以来の陰暦が廃止された。それにともない、官暦からは暦注が削除されてしまった。

今でこそ暦の出版は自由だが、それは戦後のことで、それ以前は国の統制下に置かれていた。その暦から暦注がなくなってしまったのだ。

そこで官憲の目を逃れながら、地下出版で暦注を載せた暦が発行された。もっともらしい発行所や発行人が記されてはいるが、実体は不明。出没自在で、発行所もくるくる変わる。まさに〝おばけ〟だったわけである。

この「おばけ暦」が、違法出版にもかかわらず盛況だったというのも、暦注がいかに人々の生活に浸透していたかをよく示している。

現代でも暦は隠れたベストセラーだ。毎年、数千万部の暦が売られているというが、これは驚くべき数字ではないだろうか。

陰陽道にもとづく秘占

わが国に現存している最古の暦は3点あり、正倉院に所蔵されている。天平18年（746年）、同21年（749年）、天平勝宝八歳（756年）の3点で、いずれも「具注暦」である。この場合の注とは、いわずとしれた暦注のことであり、日々の吉凶を示している。

最古の暦にも暦注が記されているということは、当然、それ以前から、暦注を導きだす暦占の法があったことになる。

では、暦占の正体とは何か。それは、国家を揺るがす変事から、個人の命運までをも予知する秘法とされた「陰陽道」にもとづく秘儀・秘占だ。

陰陽五行の原理にもとづく陰陽道は、日本の歴史と深い関わりを持ち、ときにはそれを動かしてきた。その中核をなすのが呪術と占術である。

天武天皇は、陰陽道の天文・遁甲の術に秀で、自ら占いの秘器である式盤を使って、重用な事柄を判断した。壬申の乱（672年）においては、黒雲が十余丈にわたって天にたなびくのを見て、式占でそれを占い、

「これは天下が2つに分かれる兆候である。だが、結局、自分が勝利を得て、天下を治める」

との占示を得たといわれる。

壬申の乱のあと、天武天皇は陰陽寮を設け、占星台をつくった。陰陽寮は、天文、暦数、風雲、気色、占筮相地などを司り、天に異変があったり、その他の予兆があれば、それを天皇に密奏した。

この陰陽寮に属して暦をつくり、暦法を学ぶ者の教育にあたるなど、暦に関するすべてのことを司ったのが「暦博士」である。

陰陽道の真髄に精通していた彼らは、毎日に配された十干十二支の組み合わせや、陰陽五行の相生相剋などの法則によって、日々の吉凶を繰りだしていった。

もちろん現代の暦にも、その秘占は継承されている。森羅万象を読み解くとされた陰陽道の奥義は、実に暦の中にこそ生き残っていたのである。

六曜

お日柄を知る定番がこれだ

六曜の読み方

さて、暦は奥深い叡智を継承した秘器であることがわかったところで、さっそく暦の読み方を説明していこう。まずは「六曜」だ。

暦で知るお日柄、つまり、その日の良し悪し・吉凶でいえば、この六曜がいちばんポピュラーなものだろう。暦に限らず、カレンダーにも必ず記載されているほど親しまれている。

ところで、皆さんはこの六曜をどのように読んでいるだろう。六曜の読み方はいろいろある。どれが正しいともいえないので、なじみのものを使ってもかまわないということになっているようだ。

参考までに、読み方の例をあげておこう。

先勝＝せんしょう、せんかち、さきかち
友引＝ともびき、ゆういん
先負＝せんぶ、せんぷ、せんまけ、さきまけ
仏滅＝ぶつめつ
大安＝たいあん、だいあん
赤口＝しゃっく、じゃっく、しゃっこう、じゃっこう、せきぐち

この六曜、もともとは中国伝来のもので、14世紀ごろ、鎌倉末期から室町時代にかけて日本に伝わったとされる。中国では「六壬時課」と呼ばれ、時刻の吉凶占いに使われていたものである。

日本独自の六曜

六曜は別名を「孔明六曜星」ともいわれることからわかるように、かの諸葛孔明が考案したものだという説がある。孔明は六曜を用いて軍略を立て、すべてを成功させたというのだ。

ただし、専門家の意見によれば、これは少々あやしいという。孔明が活躍した三国時代（220～280年）のころから六曜があったかどうかは、史実的に見ると疑わしいというのだ。

その詮索は学者にまかせておこう。というのも、日本に入ってきた六曜と現在のそれとは、まったく違った形になっているからだ。

前にも述べたように、そもそもの六曜は時刻の占い。それが日本に入ってきて、やがて日の占いへと変化した（17世紀ごろ）。さらに個々の名称や順序も何度か変更されるなどして、現在の形に落ちついたのは19世紀初頭（享和から文化）にかけてである。

つまり、その時点で、それぞれの名前や順序、解釈も、日本独自の六曜ができあがったのだ。

ちなみに中国伝来の六壬時課では、「大安・留連・速喜・赤口・小吉・空亡」というのが六曜の名称だった。

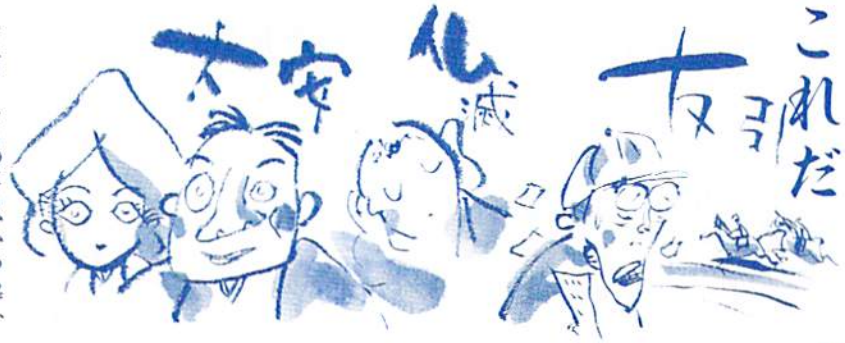
六曜の大流行は戦後

日本式の六曜は、だれによって考案されたのかはいまだに不明だ。この六曜が密かにはやりはじめるのが江戸時代の末期。それ以前の時代、人々はあまり六曜にこだわらなかったと見える。

そして、明治6年（1873年）の改暦にともない、「おばけ暦」に暦注として掲載され、人々に注目されだした。戦後になってその流れは本格化し、大流行、今日に至っている。

その意味では、暦注では最もポピュラーなものにもかかわらず、六曜は新顔のお日柄といえる。

次ページに六曜の詳しい象意をあげておいたので、参考までに読んでみてほしい。結婚式なら大安の日、お葬式は友引の日を避ける、といった一般的な意味のほかにもいろいろな意味があり、とても興味深いものだ。



先勝

文字どおり、先んずればすなわち勝つ、ということで、万事、急げば吉。のんびりしていてはダメで、迅速に行動すれば、必ずや幸運が舞い込んでくる日。

何事にも腰の重い人、石橋をたたいて渡ろうとする慎重な性格の人も、この日だけは、少しばかり性急だと思えるぐらいの行動力を発揮したほうがよい。それぐらいでちょうどいいのがこの日の特徴。

また、午前中は吉で午後は凶という象意もあるから、とくに重要なことは、午前中に片づけるような心構えも必要だ。何事も早め早めに手を打っておくことが肝要な日である。

先負

先んずればすなわち負ける——ということになれば、勝負事や急用は避け、控え目にして吉の日となる。先勝とは逆の象意を持つ日だ。

万事に平静を保ち、行動よりは思考を優先させる。また、こちらから仕掛けるのではなく、相手が仕掛けてくるのを待つ態度が重視される。

先負ということから、先へ行ってもよくないと解釈すれば、お見合いなど、将来に縁のあることも避けたほうが無難だといえる。

午前は凶、午後は吉とあるから、どうしてもやらなければならないことなら、なるべく午後からにしたい。

大安

大いに安しで大変おめでたい日。結婚、移転、開店など、万事に吉の日とされる。今では大安は結婚式の日となっているが、もちろんそれ以外でも、すべてのことがかない、成功する大吉日だ。

大安吉日、あるいは泰安とも記されるように、この日は迷いを捨てて行動すれば、必ずや成果がもたらされるはずだ。心の迷いを吹っ切り、一歩を踏みだすきっかけに使えば、実りも多いだろう。

また、行き詰まった交渉事、懸案事項など、どうにもうまくいかなくて放っておいたことも、積極的にチャレンジしてみれば、解決の方向が見えてくるはずだ。

友引

凶事に友を引っ張る、あるいは凶禍が友に及ぶということで友引の日となり、弔事をなすことは大凶とされる日である。

古くは陰陽道の「友引日・友曳方」という、ある日にある方向に事を行うと、凶禍が友に及ぶという原理からきたという説もある。

また、「勝負がつかない日」ともあるから、何事も引き分けで成果のない日の意味もある。本当に勝利を手にしたければ、この日は避けたほうが無難。せっかくの苦労が、結局、成果となってはあらわれない。

なお、朝晩は吉だが、正午だけは凶とされる。

仏滅

仏も滅亡するような最悪の日で、万事に凶。この日は六曜のなかでも大凶の日で、すべてがむなしい「物滅」から仏滅となった。仏陀の命日ではないので念のため。

いずれにせよ、祝事・法事などすべてに凶で、何事をなしてもうまくいかない日とされる。婚礼などの祝儀はとくに忌むとされ、結婚式場は閑古鳥が鳴く。それを逆手にとってもいいが、あえて火中の栗を拾わなくてもいいだろう。

また、移転・開店も禁じられ、この日に病むと長引くとされる。なるべくなら、特別のことをしないで過ごしたい日である。

赤口

万事に凶の日だが、午の刻（午前11時より午後1時）だけは吉。陰陽道でいう凶日のひとつで、とくに祝い事には大凶とされる。

また、昔から、赤口の日には火の元に注意せよ、といわれているが、これは赤という字が火を連想させるからだろう。同じように、赤は血をも思い浮かばせることから、板前や大工など、刃物を持つ人たちにはとくに要注意日とされる。

ともあれこの日は、あまり過激な行動は慎み、身のまわりに注意をはらって過ごすことが肝要。そうした象意の強い日である。

七曜 日 月 火 水 木 金 土

七曜というと、日曜から始まり土曜で終わる一週間の曜日名としか思わない。しかし、この七曜にも、それぞれの吉凶がある。

もともと七曜とは、古代において見分けられた7つの星、すなわち太陽・月と木星・火星・土星・金星・水星の総称であり、さらには、それを用いて吉凶を占うことを意味していた。

日本に七曜を伝えたのは、かの空海で、七曜は空海が中国から持ち帰った『宿曜経』に記されたものだとされる。以下、七曜の吉凶の例をあげておく。

- 日曜…万事によい日。金銭に縁のある日で、商売をしている人は、利益倍増の吉日。
- 月曜…だいたいにおいてよい日だが、日ごろの行いが悪い人は、難にあうこともある。
- 火曜…万事に凶の日で、とくに旅行には注意。慎重な行動が望ましい。
- 水曜…日ごろから努力している人は、それが実を結んで喜び事のある日。ただ、水には注意。
- 木曜…万事によい日。普通なら大過になるものも小過ですみ、切り抜けられる。
- 金曜…災難が多く、注意が必要な日。とくに事故などには気をつけ、慎重な行動が必要。
- 土曜…凶というほどでもないが、何事も慎んだほうが無難な日。損をしやすい。

九星

9つの星で運勢を知る！

本命星で'95年の運勢を占う

寿福を招来する九星術

九星というと、天上に輝く星を連想するかもしれないが、そうではない。親しみやすいように星と名づけられていても、実際は天地の間を循環する9つの気を名づけていったものだ。

一白水星、二黒土星、三碧木星、四緑木星、五黄土星、六白金星、七赤金星、八白土星、九紫火星の9つをいう。

この九星を用いた占いが、九星術とか気学とか称される吉凶判断術だ。天変地異、政治経済から個人の運命まで、すべてに的確な判断を可能とするものである。

そればかりではない。未来を予測することによって災禍を避け、あるいは吉方位を用い、吉意の家に住むなどして、寿福を招来することのできる招福術でもある。

九星は、年・月・日・時を刻々と移動する。たとえば1995年を支配する星は五黄土星だが、翌年には四緑木星、翌々年には三碧木星……と、支配星が移動していく。この動きには一定の原理があり、専門用語では遁甲という。

それぞれの年の九星の位置を示した盤を年盤といい、月・日・時の九星の位置を示した盤は、それぞれ月盤・日盤・時盤という。

自分の本命星を知る

九星術では、人は誕生した年の年盤中央（中宮という）の星の気を生涯にわたって保有し、その星によって、性格や運勢などが決定されるとする。つまり、五黄土星の年に生まれた人は、五黄土星の支配を一生涯受け、四緑木星の年生まれなら、生涯にわたって四緑木星の影響を受けるというのだ。

というわけで、九星を用いる場合には、まず自分の生まれた年の星＝本命星がなんであるかを知る必要がある。この点が、万人共通のほかの暦注とは違うところだ。

下の「九星早見表」で自分の本命星を調べてほしい。なお、九星術では、一年を立春から数えるので、1月および2月の節分の日までに生まれた人は、前年の九星になるので注意すること。

さて、自分の九星がわかったら、'95年の運勢を読んでみよう。

★九星早見表

四緑	三碧	二黒	一白	九紫	八白	七赤	六白	五黄
1897	1898	1899	1900	1901	1902	1903	1904	1905
1906	1907	1908	1909	1910	1911	1912	1913	1914
1915	1916	1917	1918	1919	1920	1921	1922	1923
1924	1925	1926	1927	1928	1929	1930	1931	1932
1933	1934	1935	1936	1937	1938	1939	1940	1941
1942	1943	1944	1945	1946	1947	1948	1949	1950
1951	1952	1953	1954	1955	1956	1957	1958	1959
1960	1961	1962	1963	1964	1965	1966	1967	1968
1969	1970	1971	1972	1973	1974	1975	1976	1977
1978	1979	1980	1981	1982	1983	1984	1985	1986
1987	1988	1989	1990	1991	1992	1993	1994	1995

一白水星

この星の人は、水と非常に関係が深い。水は形がなく、入れ物によってどのような形にもなるが、この星を本命星にする人の運も、水に似て外部環境に影響されやすい。

才気・愛嬌があって社交性に富んでいるが、内心、片意地なところもあるので注意しなければならない。ほかの星であれば、本命星が一白宮にきたときには運気が停滞し、何事もうまくいかず、苦労の多い年となるが、自分の本宮であるために運気は強くなっており、多少の問題などは簡単に解決できる。自信を持って行動してもよ

二黒土星

この星の人は、平地の土の気を有している。もともと天から授かった福徳があり強運だが、平地の土が万物を生育し、自らの養分を失ってしまうように、親族や友人に自分の福運を吸い取られがちなので注意が肝心だ。

'95年の運勢はかなり上向きになってきてはいるが、いまだ急速に発展するというほどの勢いはない。事を急いで実現させようと焦ることなく、気力を充実させ、力をためていくことが必要だ。

職業、住居、人間関係のどれかに変化が生じる兆しが

三碧木星

この星の人は、東方の万物が発生する地に位する木の気を有している。よって樹木のように若々しく、上へと伸びていく勢いや徳があるが、勢いにまかせて猛進すると損木となってしまう。人より上に伸びようとするならば、何事においても短慮と猛進を慎まなければならない。

'95年は開運の年で、あらゆる方面の事柄を積極的に押し進めていって、吉となる兆しがある。単なる思いつきで着手するのではなく、これまで準備してきたこと、計画してきたことなどを思い切り断行して、よい結果が得

いだろう。学問、研究などに励むと吉である。
三碧、四緑、六白、七赤の人とは相性がいいので、問題があれば相談し、手助けなどを頼むことだ。きっといい結果を得られるはずである。なお'95年は体調が変化しやすい年なので、健康にはとくに気をつける必要がある。

四緑木星

この星の人は、とりわけ繁茂する木の気を有している。その性質は温和で、柔軟な社交性の持ち主である。人によっては暴風のような激しい怒り方をする人もいるが、おさまるとすこぶる静かである。
'95年は順風満帆の年で、今まで解決できなかったような問題はもちろんのこと、何事も思うように実現する幸運の年だ。独身者などは良縁に恵まれる年でもあり、そのチャンスを逃さぬようにしなければならない。
この星の人は、考えすぎて好機を逸しがちなので、決断を早くすること。また、強情を張るのは星の本性に反するので、他人の言を従順に聞くことが運を開くコツ。
相性は一白の人が大吉、三碧、四緑、九紫の人は中吉なので、それを考慮してつき合うとよい。健康に関しては、風邪を引いたり胃を悪くしがちなので要注意である。

七赤金星

この星の人は、精錬された金属、象徴的には貨幣の金の気を保有している。そのため、なんとはなしに人を喜ばせる徳がある。もっとも、表は柔和で人に対して愛嬌があるが、内は傲慢でいばるところがある。人を喜ばす性質を持っているために立身出世も早いが、その虚言が災いして信用を失うことも多いので、多言は慎むのが運気保持のポイントである。
'95年は万事に好調で、勉強、仕事、金銭面、それに人間関係でもいい実りを得ることができる。注意するとすれば、あまり欲をかかないこと。過大なものを期待すると不平不満につながり、運気を損なうことになるからだ。
二黒、五黄、八白の人とは相性がよく、うまくいくはずだ。ただ、軽率な言葉で思わぬ問題が生じる兆しも見えるので、注意が肝心である。ケガに注意のこと。

見えるが、その対応には十分に注意する必要がある。
'95年は、六白、七赤、八白の人との相性がいい。しかし、相手に何かをしてもらうのではなく、何かをしてあげる積極的な態度が吉につながる。病気になると長引く象意が見られるので、心身の管理が大切だ。

五黄土星

この星の人は、中央の土の気を保有している。したがって自然に威厳が備わり、強運であり、人の上に立ってリーダーとなる人が多い。ただ、その地位に恵まれないと、人に従うことを嫌い、我意が強く、いばる癖が出て、人に憎まれることも少なくない。謙虚さを心がけ、人と争わないことが運気を強めるポイントになる。
'95年の運勢は、本命星が中央にあるため、すべてがこの星の人を中心に動くことになり、運気は非常に強い。ただ、勢いに乗りすぎて、万事に行きすぎの傾向が生じがち。それが破運の原因になりやすいので、注意が肝要だ。何事も強気、強気でいきたくなる年だが、周囲の人や年長者の意見をよく聞き、慎重に事を運べば万事吉。
九紫の人はとくに相性がいいので、この人を頼りにするとよい。消化器系統の病気やケガなどに要注意。

八白土星

この星の人は、山岳に象徴される陽の土の気を持っている。山岳が鉱物、宝石、樹木などを産出するように、財貨を得ることはできるが、散じやすい。また、表面は豪気なようで内心温和、気長なようで、内心気短である。
'95年は変動の年で、周囲や自分に大きな変化が生じやすい兆しがある。そのとき変化の潮時をどうつかむかが'95年の大きなポイントになる。また'95年は、未婚者には愛情面でツキが生じる。つまり、一生をともにしてもよいような異性が出現する兆しが見られるのだ。既婚者の場合は、夫婦で力を合わせる共同の目的を持つと吉になる。たとえば家を新築するとか、マンションを買うなども、一致協力して行えばよい結果となる。
ともあれ周囲の人と和合することが大事で、和合を欠くと破運をまねくので注意しなければならない。

られるだろう。ただし、人にだまされる兆しも見えるので、相性がとくによい一白の人の助言を求めたり、手助けしてもらうようにするといいだろう。
肝臓などに異常をきたしやすい年なので、お酒はほどほどに。また、交通事故にはくれぐれも用心すること。

六白金星

この星の人は、まだ精錬されていないあら金の気を保有している。天（乾）を本宮としているので、天の徳を持ち高尚で気位が高い。また、あら金のように、朴訥でかたくなな人も少なくない。人に負けないように努力する人が多いが、猪突猛進というところもあり、意外な失敗を繰りかえしがちなので、思慮深い行動がポイント。
'95年は万事において大いに発展する年で、期待の持てる運勢である。とくに年上の人の助言があったり、目上の人の引き立てがあったりして、自分だけの力ではとうてい実現できないようなことも、なし遂げることのできる年となる。積極的な行動が幸運をまねくポイントだ。
二黒、八白の人とは、とくに相性がよい。五黄の人には振りまわされやすいので要注意。働きすぎてノイローゼになったり、交通事故などに注意のこと。

九紫火星

この星の人は、陽である火気を有する。したがって、陽気盛んで派手さを好む人が多い。また、聡明な人も多いが、移り気で飽き性である。初めは威勢よく着手するのだが、しだいに火が消えるように関心を失ってしまうのである。だから、この星の人は、いろいろなことに手を染めるのは控えるほうが吉である。
'95年は太陽の昇るような運気で、これまで努力してきた人は、合格、昇進、栄誉などの幸運に恵まれる。ただし人によっては、今までの悪事が露顕したり、病気が再発したりする兆しが見える。また、文書や印鑑の間違い、火難、盗難などの暗示もあるので、注意するにこしたことはない。身辺の用心を欠かさないことである。
三碧、四緑の人とは非常に相性がいいので、新しく交際を始めるチャンスの年でもある。

九星

月と日の九星で占う

盤を重ねて占う九星術

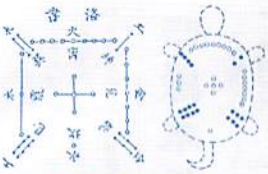
九星を使えば、月や日の運勢までをも知ることができる。その方法をここで簡単に紹介しておこう。

九星を使いこなすために、最初に知らなければならないのは、定位盤だ。これは「洛書」といわれるものがその淵源となっている。

古代中国の夏の国の禹王が、毎年、氾濫する河の治水に成功し、人民の窮状を救った。そのときに天が奇瑞を顕した。神亀が現れ、その背中に1から9までの神紋があったという。これを図にしたものが洛書なのだ。

この洛書を簡単にし、数字だけで示したものが定位盤と呼ばれ、九星の循環運行を見、運勢を占うための基本図となる(左図参照)。

実をいえば、先に'95年の運勢を九星別に述べたが、それはこの定位盤に年盤を重ね、年盤の上の各星が、定位盤のどこに位置しているかで判断したものなのだ。



4	9	2
3	5	7
8	1	6

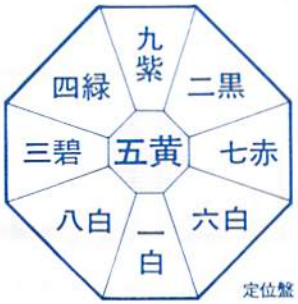
九星基本図

このように、盤を重ねるというのが、九星術の基本になっている。月の運勢であれば、年盤の上に月盤を重ね、月盤の本命星が年盤のどの星と座所(宮という)を同じくしているかで判断する。

また日の運勢なら、月盤の上に日盤を重ね、日盤の本命星が月盤のどの星の宮にあるかで運勢を判断する。

このときに、月盤、日盤の自分の本命星が、定位盤ではどの宮に位置するかということも、考慮に入れることが大切だ。それによって判断は複雑さを増すが、それこそが占断の妙味とでもいうべきところである。

なお、それぞれの盤は以下のようになる。



定位盤

●定位盤…五黄が中宮に入った盤。

●年盤…その年の九星が中宮に入った盤。'95年は五黄の年なので、たまたま定位盤と同じになる。

●月盤…その月の九星が中宮に入った盤。たとえば一白の月なら、一白中宮盤が月盤になる。

●日盤…同じく、その日の九星が中宮に入った盤。

以上の盤は、左図ですぐにわかるはずだ。

月運・日運の占断例

ここで参考のために、本命星が九紫火星の人の'95年7月7日の月運と日運の出し方を示してみよう。

付録の暦を見ればわかるように、7月は六白金星の月であり、7日は一白の日である。

それを確認したところで、まず月盤を年盤の上に重ねる。すると本命星の九紫は八白土星宮にある。よって、左ページの象意から、八白土星宮を参考にして月の運勢を判断する。7月の運勢は「万事、変化の生じる月」ということだ。

なお、定位盤は年盤と同じなので、ここでは考慮する必要はない。

次に日の運勢を見るには、日盤を月盤の上に重ねる。すると本命星の九紫は五黄宮の上にある。よって九紫は五黄の影響を受け、「運

気が非常に強くなる日」ということが占えるのだ。

ここで注意しなければならないのは、定位盤ではどの星の上に乗っているかも考慮するという点だ。定位盤を主体に考えた場合、日盤の九紫は四緑木星宮の上に位置している。そこで、四緑木星の影響も加味して判断するのだ。四緑宮の象意は「未解決事項が解決に向かう日」である。

ということになれば、最初に出た「強い運気」という象意も加勢して、停滞している物事を片づけるには絶好の日であり、必ずやいい成果が見込める日――と占断できるのである。

紙幅の関係で以上の一例しか紹介できないが、実際に盤を重ねてみれば、案外、わかりやすい占い方である。何度か自分で判断しているうちに、そのコツがおのずとわかってくるものだ。ぜひ、トライしてみてほしい。

一白水星宮

水が器の形に合わせて変容するように、環境に自分を合わせることを学ぶべきときである。万事、早め早めに手を打とうとしても、どうも目算はずれでらちがあかない暗示がある。落ち込んだ泥沼からの抜け道を捜して、試行錯誤する兆しである。しかし、一気に問題が解決することはなく、粘り強くやるしかない。新しいことに挑戦する場面も多く、新しい交際なども始まる。異性面でのトラブル、病気などには、とくに注意が必要だ。

二黒土星宮

次のチャンスに向けて、人間関係をつくりあげておくべきとき。開運の芽が伸びだす兆しがある。この星の上に本命星が位置したときには、人に勧められたことを素直に実行し、与えられた仕事にまじめに取り組み、着実に努力することが開運のポイント。ただ、仕事のしすぎなどで体を壊しがちな暗示もあるので、疲れを翌日に残さないよう、睡眠を十分にとることが必要なときでもある。また、不動産に縁ができる暗示もある。

三碧木星宮

自分自身の中に、自信がわきだしてくるときである。今まで調子の出なかった人も、やる気が出てきて活動的になる兆しがある。ただ、一足飛びに大きな成果を得ようと、つまらない話に乗って被害をこうむる暗示もあるので注意が肝要だ。また過去のことが、それがよいことであれ悪いことであれ、表に出るという兆しがあるので、今まで努力してきた人は成果が人に認められ、隠れた悪事がある人は、それが知られることになる。

四緑木星宮

今まで解決できなかったことが、ひとつひとつまとまっていくときである。事業や商売をしている人なら、人に信用されやすくなり、引き立てに恵まれ、仕事が順調にいく兆しがある。未婚の男女は、良縁に出会うチャンスが多くなる。既婚の場合には、人間関係が明るく楽しいものとなる。交際範囲が広がり、旅行に出かける暗示もある。ただ、これまで無意味にすごしてきた人の場合は気迷いが多くなり、何事も決着が遅くなるときとなる。

五黄土星宮

運気が非常に強くなるときである。ただ、これまで順調にきた人の場合は、すべての面でのぼりつめた状態になるので、あとは下るしかなく、きしみが出てくるときでもある。今まで不調だった人は、運気回復のチャンスのとき。思い切った行動が幸運をまねくことになる。また、一身上にも大きな変化があり、結婚、転業、移転などの事象が起きやすい暗示がある。健康面でも変化が出やすいので、自分の健康を過信することは禁物である。

六白金星宮

自然と言動に活気が出て、何事にも積極的に行動する暗示がある。この積極的な言動が目上の人などに認められて、名誉や地位の向上などに恵まれるときである。ただ、積極性がすぎて自己主張が強すぎ、人と争ったり、勇み足になると、まわりの反感を買って、運気を損なうこともあるので注意が肝心だ。また、気が大きくなって衝動買いに走ったり、外出が多くなって金銭を浪費する兆しもあるときなので、程度をわきまえることが必要。

七赤金星宮

楽しいこと、喜ばしいことの多いときである。恋愛、娯楽、スポーツ、飲食など、心が浮き浮きするようなことが続出する。金銭面でも予期しないようなお金が入ってくる兆しがある。ここで注意しなければならないことは、そうしたことに有頂天になっていると、気のゆるみから仕事のミスをしたり、周囲の人とのケンカ、口論、浪費による財政ピンチなどをまねく暗示もあることだ。また、手術を必要とする病気などにも注意。

八白土星宮

万事に変化の生じるときである。その変化がよい意味での運勢の転換となるか、逆に悪い意味での変革になるかは、それまでの各自の運気や言動によることが多い。一般的には、これまで順調であった人は悪運に泣き、これまで不運であった人は好運に恵まれることが多いときである。また、兄弟、親戚などとトラブルを起こしたり、腰や膝の関節などを傷める暗示があるので要注意。不動産に関するトラブルの暗示もある。

九紫火星宮

万事が火のようにはっきりと明白になるときである。頭なども冴えて、かなり先のことも見通しがつくので、株や土地を買ったり、新規事業に着手するなどしても、成功に結びつきやすい暗示がある。また、これまでの努力が認められて名誉や地位を得たり、人によっては逆に仕事のミス、過去のスキャンダルなど、隠しておきたい内緒事が露顕する暗示もある。恋人との別離、書類の不備、目の病気、神経衰弱などの暗示もあるので要注意。

十二直

北斗の運命支配力で占う

北斗七星の斗柄3星

十二直は、日々の運勢を見るうえで、最も重視されてきた暦注である。付録の暦では下のほうに配したが、一般には運勢暦の中ほどにあることから、中段と呼ばれることが多い。ほかに十二客とか十二建ともいわれる。

その起こりを調べてみると、北斗七星と結びついていることがわかる。

北極星を中心に回転する北斗の七星は、古来から神格化され、万物の運命を支配する力があると考えられてきた。なかでも下の絵に示した3星は「斗柄」といい、ひしゃくの柄に当たる部分として重要視された。

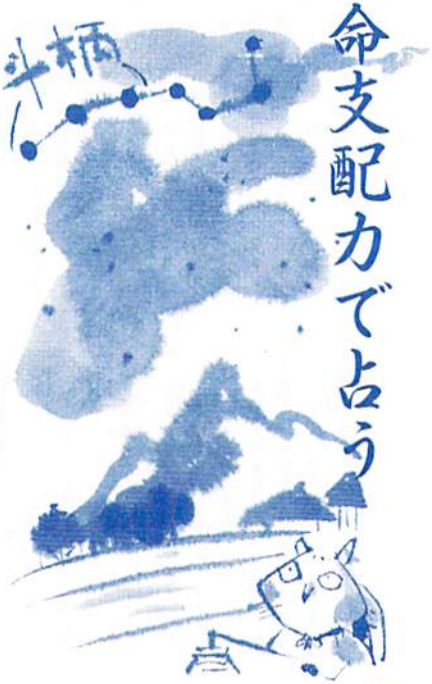
この斗柄は、北極星を中心に一日1回転する。そこでこれを12等分し、時刻や日、季節を判別するのに用いられるようになり、やがてそれが発展し、十二直という日日の吉凶占いが行われるようになったとされる。

天地人のうち人に相当

十二直の直は「あたる」と読むことができ、その位にあたるということであり、また別名の十二客の客は、外より来て宿るという意味である。

付録の暦では十二直をひらがな表記にしたが、漢字に当てはめると次のようになる。

たつ＝建　のぞく＝除
みつ＝満　たいら＝平
さだん＝定　とる＝執
やぶる＝破　あやぶ＝危
なる＝成　おさん＝納
ひらく＝開　とず＝閉



天干地支という言葉があるが、十干は天地人三才のうちの天に、十二支は地に相当している。そしてこの十二直は、人に相当するといわれている（十干十二支については101ページ参照）。

この十二直も中国より伝えられ、先に紹介した正倉院の只注暦にも記載されている。古くから重要視されてきた暦注なのである。

たつ（建）

建とは、天帝による世界造立の意味であり、万物の発生をも象徴する。したがってこの日は、いっさいのことを発起したり、建物を建てはじめるなどには吉である。ただし、そのほかのことについては凶とされている。

たいら（平）

この日は、いっさい平安の日である。よって家を建てる、引っ越しをする、婚礼をするなど、何事にも大吉の日とされる。天帝が集まり、人間に万物を平分（平等に分ける）する日である。

のぞく（除）

この日は、天帝がいっさいの凶を祓い除く日であるとされる。そのため、とどこおっていた事柄を解決したり、原因がわからずにつまずいていたことなどに取り組むとよい。また、掃除や治療などに用いて吉とされる。

さだん（定）

この日は、天帝がお客の座るべきところを定める日であるという。したがって、何かの役を定めたり、掟を定めるのには吉とされてきた。広く解釈して、決定事項や決断には吉日といえよう。

みつ（満）

この日は、いっさい充満、すなわち、天帝が宝蔵に種種の宝を積み満たす日とされる。したがって、五穀の収納、財を求める、蔵を建てるなどにはよい日とされる。万物が満ちあふれる象意のある吉日だ。

とる（執）

天帝がいっさいを所持するという日である。そこから、日ごろは手の届かない貴重なものを、自分のものにするといった、何かを獲得しようと努力するようなことには吉とされる。

やぶる（破）

いっさいを破るという日である。したがって、昔であれば城攻めや合戦をするには吉とされた。現代でいえば、攻めてよしという日。したがって、訴訟や争い事には吉だが、おめでたいことの決定には凶であるとされる。

おさん（納）

この日は、天帝が万宝を宝蔵に納める日とされる。そこから、大きな買い物をして家に納める、といったことを初めとして、結納をかわすなど、何事をなすにも大吉の日といわれる。

あやぶ（危）

何事をするにも危うい日とされる。したがって、新規開業したり、新しい仕事などを始めても、次々と悪いことが起き、なかなか成就しないという。日を改めることを考えたほうがよさそうだ。

ひらく（開）

天帝が宝蔵の扉を開く日とされる。したがって、蔵を開くに通じるようなことすべてに吉。たとえば、諸芸を学びはじめる、事業を始める、海外に雄飛するなど、門戸を開いて旅立つようなことには大吉であるとされる。

なる（成）

万事が成就するという吉日である。入学・入社などを願ったり、また、何か大きな望みを持って、事を始めるには最適の日であるとされる。大志を抱いている人には格好の吉日といえる。

とず（閉）

この日は、宝蔵の鍵を閉じる日、もしくは天地の陰陽が閉塞する日とされる。したがって、いっさいのことに用いて大凶の日とされる。おとなしく過ごしておくのが無難な日といえよう。

二十七宿

古法の星宿が暗示する日並吉凶

ルーツはインドにある

古代中国において、月の天球上の位置を示すために28の星座が選ばれ、「二十八宿」として用いられていた。この二十八宿がインドに渡り、二十七宿となって、主に日の吉凶を知るために用いられるようになった。そして、唐の時代、中国に逆輸入され、やがて日本にもたらされた――。

これが二十七宿の由来である。その詳細は『宿曜経』に収められているが、前述したように『宿曜経』を日本にもたらしたのは空海である。

伝えられた当初は、二十七宿のまま使用されたのは当然のことだが、貞享改暦（1684年）以後は二十八宿を使うようになり、今日でもそれを採用している暦は多い。

しかし、インドの天文学・占星術で優勢だった二十七宿は、月の占める星宿により日の吉凶を見、運勢を占う点からいえば、二十八宿より正確なものである。

その証拠に、二十七宿は、七曜、九星と組み合わせ、高い的中率を誇ったと伝えられる。伝来して以来、朝廷の儀式、戦略などに使用され、その的確さが人々を驚かせたのだった。

付録の暦は二十七宿採用

二十七宿から二十八宿への変遷過程はよくわからないが、一説によれば、あまりにも高い的中率のために、二十七宿は特権階級のみのものとされた。そして、お止め流となり、一般に出ることがなくなったという。

改暦により、二十八宿が一般向けのものになったのも、そのあたりの事情があったからなのかもしれない。

付録ではこの二十七宿を採用しているので、ほかの暦と比較してみるのもおもしろいだろう。

ちなみに二十七宿の場合、二十八宿のうちの「牛宿」を除いて星宿の構成としている。

角（かく）

飾りのことはすべてよろしいとあり、この日は、正式に着飾ると幸運が訪れる日。婚礼や開店、神仏の祭りなどには大吉。歌舞や諸技芸などを習いはじめるにも吉。

房（ぼう）

この日は、結納、婚姻、棟上げなど、喜び事、祝い事には大変にいい日。万事が成就する象意があり、新事業の開始などにはうってつけの吉日。旅行などにもいい。

箕（き）

昔はしょう油や酒づくりに吉とされたが、現代なら家庭でつくる果実酒などになろうか。そのほかのことにはよくないとされ、つつましく過ごすのが無難な日である。

虚（きょ）

この日に学んだことはよく習得できる。商売にもいい日。急いで処理しなければならないことにはいい日とされる。ただ、祝い事などは控え、進むにも慎重さが要求される。

壁（へき）

結納、婚礼、家を建てるなど、すべての吉事を行うにはよい日。新事業、新規開拓、拡張など、仕事面でも新しい分野への進出に吉。ただ、この日に南に行くことは凶。

胃（い）

この日に結婚や結納などを行うことは凶とされる。ただし、自分に逆らう人物や、要注意人物を思いきって処分するにはよい日。一般的に荒々しさを要することに吉。

觜（し）

家を建てる、家具をつくる、新しい家に移る、婚姻するなどにはよい日。新規の事業を始めたり、投資などは控えたほうがよい。この日に服をつくると損失大。

鬼（き）

万事をなすのによい日。二十七宿のうちでも、最高によい日とされる。吉祥日なので、とくに公の行事や式典など、この日に行うと支障なく運び、成功する。

張（ちょう）

すべての喜び事によい日。婚礼、見合い、新築、就職、開業など、慶事を行って幸運をまねく日とされる。事業などでも拡張計画を発表するなどに適した吉日。

亢（こう）

吉日なので、すべての祝い事に用いてよい。また、とくに音楽を習うのによい日。この日に知り合った人とは、あとあともうまくいくので、交際範囲を広げて吉。

心（しん）

車の初乗り、移転、旅行に吉の日。ただ、この日の浪費はいい結果を生まない。出費全般に凶意が強く、金銭の出入りのうち、出に注意をはらうことが肝要とされる日。

斗（と）

結納、家の造作、造園、車の買い替えなど、あとに残るものに関してはすべてに吉とされる日。事業なども、新規開拓すると、あとにつながる成果が出る日。

危（き）

この日は薬を服用し、商売に出かけ、また借金の取り立てなどによい日。ほかのことには凶日とされ、とくに高所での仕事や移転は凶意が強いといわれている。

奎（けい）

宝石類を買ったり、盛装して外出したり、新しい服をおろしたりするにはよい日。移転や旅行なども吉の象意があり、おおむね吉祥の強い日といえる。

昴（ぼう）

非常によい日。どんなことでも進んで決断して吉。祝い事や神仏の祭事、棟上げ、転居、相談事など、万事よしとされる。願望成就の象意の強い日である。

参（しん）

お金を借りたり、何かを買ったりするのにはいい日。また、決断を下すにも吉の日。旅行にもいい。ただし、葬儀を行ったり、衣類をつくることには凶意がある。

柳（りゅう）

一般的なことには悪い日だが、強く、荒々しいことをなすには適した日。敵対する人物や害となる人物は、処断すると吉。そのほかは守勢にまわったほうがいいだろう。

翼（よく）

何をなすにもよい日。家の改築を行い、垣をつくり、農業、商業を初め、結婚など、すべてに幸運をまねく。また、この日に衣類を裁つと、意外な収入があるとされる。

氐（てい）

花の種をまき、接き木などをするのによい日。この日に衣類を購入したり着はじめたりすると、知人に貸して自分は着られなくなるような目にあうという。

尾（び）

この日は、家宅の造作、婚礼、店開き、旅行など、喜ばしいことにはすべてよい日。また、修行や就学に吉とされるので、一念発起で厳しい道をめざすのにもよい日だ。

女（じょ）

芸能に関することの稽古はじめに吉。希望の習い事があれば、この日から始めるとよい。そのほかのことにはおおむね凶で、とくに人と競い、争うことはよくない。

室（しつ）

この日は、厳しいこと、たけだけしく荒々しいことを行うにはよい日。ただ、祝い事にこの日を用いることは禁物とされ、日を改めたほうがよいといわれる。

婁（ろう）

きわめて順調な吉日。万事、望むことを急いで進めてよい日。改築・修繕、結納、婚礼、交渉事などに吉。とくに急を要する事柄を行ってよしとされる日である。

畢（ひつ）

大変によい日。農耕や種まき、土木関係に吉。また、建物の増改築、修理などにもよい日である。注意するのは、投資や返済などの金銭関係のトラブルだけだ。

井（せい）

穏やかな日。貧しい人や困っている人へのほんの少しの施しでも、大きなよい報いとなって返ってくる。ただし、薬の服用や衣類裁ちには注意する日とされる。

星（せい）

この日は、農作業や家屋などの修理、改築には吉。結婚、葬式、契約など、祝儀・不祝儀に通じることは、控えたほうがいいとされる。とくに葬儀は凶意が強いので注意。

軫（しん）

この日は、土地、建物の売買などに吉。また結婚、海外旅行にもよい。芸事を習いはじめたり、新分野の開拓に乗りだすなど、新規のことをスタートさせて吉の日。

選日・下段

運勢判断の宝庫を開く！

たくさんある選日

これまで述べてきた暦注に含まれないものを総称して選日、または雑注という。付録の暦では、取捨選択したものを、行事と同じ欄に記載してある。簡単に説明しておこう。

●一粒万倍日…一粒の籾が万倍にも実るという意味の吉日で、仕事始め、開店などによい日。

●天一天上日…天一神という方角神が天上にある住日とされ、どの方角にいっても天一神の祟りがない期間とされる。癸巳から戊申までの16日間。

●不成就日…万事が成就しない日。ことに、結婚、移転、開店、契約などが凶とされる。

●十方暮…天地の気が相剋して万事うまく運ばない期間。甲申の日から癸巳までの10日間。

●三隣亡…棟上げや上起こしなど建築関係には凶日。昔から有名な忌み日である。

●大土・小土…土に関係することを忌む日。それぞれ7日間。

●八専…物事が順調に進まない期間で、婚礼、売買、仏事に凶とされる。壬子から癸亥までの12日間。

暦の下段の日並吉凶

暦には多くの日並吉凶が記載されているが、とくに最下段の暦注は「暦の下段」と呼ばれている。ここには22個の日並吉凶が顔を見せる。年の吉凶とか月の吉凶に比べ、日の吉凶は、中国にしろ日本にしろ、その数が実に多いのだ。

ほとんどは、安倍晴明の著作と信じられている『重暮内伝金烏玉兎集』に繰りだし方が記されているが、101ページで説明する十干十二支の組み合わせや陰陽五行の相生相剋などによって、日々の吉凶が定められている。

付録の暦では、スペースの制約もあり、下段の暦注を取捨選択して行事の欄に載せた。以下に簡単な説明を加えておく。

●大明日…『礼記』に「大明は東に生じ、月は西に生ず」という言葉があるが、大明というのは、太陽のことである。陰陽和合した大吉日とされ、家屋の造作、移転、旅立ち、また、嫁などを迎えるには絶好の日とされている。

●天赦日…この日は天が万物を養い育て、いっさいの罪を許してくれるという日で、何事をなすにも最上の吉日とされる。というのも、この日の干支がすべて相生（101ページ参照）となっているからだとされる。

●受死日…この日は暦に「●」のように黒丸を記すので、一名、黒日という。この日は全身に口のある悪神が遊行する日とされ、暦のなかでもとりわけ悪日とされている。付録では「要注意の●日」と示してある。

●十死日…この日は、受死日に負けず劣らぬ大凶日とされる。その説によれば、かつて宝頂山という山の麓に久命という法力がおり、9人の王子がいた。その王、王子がともに、酉、巳、丑の日（この3つは三合という関係になっている）に死去したので、この日をもって十死日となしたという。

吉凶が重なったとき

暦には実にさまざまな変化吉凶が秘められている。これまでの解説で、それを痛感した人も多いことだろう。その意味で暦は、並みの占い書より、はるかに内容豊富な運勢書といえる。

ただそれだけに、吉凶が重なり合って判断がつきかねる場合も出てくる。そんなときにはどうすればいいのか。

基本的には、吉が重なればよい象意がさらに強くなり、凶が重なれば凶意がさらに増幅されるという。その点を踏まえ、自分なりに吉凶を判断してほしい。

また、それぞれの象意も、そのすべてが作用するわけではない。いくつかある象意のうち、どれが強く作用するかは、その人の置かれた境遇にも関係してくるからだ。そうした点も留意しつつ、暦を活用していただきたいものである。

吉日・悪日はこうして見分ける

冒頭で、謎に包まれた陰陽道の秘儀・秘古が、暦のなかには色濃く残されているといった。これは驚くべき事実だが、付録の暦を見て、すぐにそれとわかる人は少ないだろう。

もちろんそれでも、これまでの解説で暦を活用することは十分にできる。ただ、暦のおもしろさをさらに知っていただくために、最後に暦占の基礎的な仕組みにふれておこう。

ここでは、そのために必要な、陰陽と五行の思想、そして、十二支について話していく。

万物の根元、陰陽の2気

さて、暦占の基本は、陰陽道の原理でもある陰陽の思想にある。

陰陽とは、万物をつくりだす陰と陽の2気をいう。陰と陽の関係は、たとえれば日陰と日向、地と天、女と男といった具合に、相反する関係にある。

そして、この相反する2気の結合・反発の働きによって、森羅万象、宇宙のありとあらゆるものが、消長盛衰して存続していく――とする世界観が陰陽思想である。

暦に関連して、陰陽の消長を当てはめると次のようになる。

●陰…陰は冬至のときに繁盛の極に達し、その後、しだいに衰えて夏至のときに皆無となる。が、陰は消滅したその瞬間に再び生じ、しだいに長じながら、冬至のときに再び繁盛の極に達する。

●陽…陰とはまったく反対に、陽は夏至のときに繁盛の極に達し、その後、しだいに衰えて冬至のときに皆無となる。しかし、陽は消滅したその瞬間に再び生じ、しだいに長じながら、夏至のときに再び繁盛の極に達する。

この考え方は、現在の暦にもちゃんと生きている。たとえば、立春は春の訪れといわれるが、そのころがいちばん寒い。これは矛盾でもなんでもない。

陰陽説でいえば、立春とは寒さの極で、もうこれ以上は寒くならない、つまり、これからは暖かくなるだけだから、春が立つ時期というわけだ。

五行の5気と相性・相剋

陰陽の2気に対し、五行思想では、自然界に存在するものすべてが、木・火・土・金・水という5つの元素から成り立っており、これらが結合したり反発しあったりして、自然界が循環し、さらには発展していくと考える。

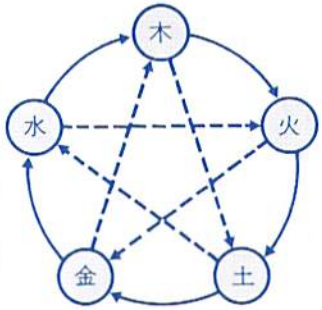
このとき重要になるのが、五行の「相生・相剋」の関係である。

●相生…下図の実線で示したように、木→火→土→金→水と、順応して生じていくいい関係。たとえば「木生火」の場合、木と木をこすりあわせれば火が生じる。このように、単純だが、自然の理にかなった関係をいう。

よく相性がいいといわれるが、これから生じた言葉である。

●相剋…右図の破線で示したように、木→土→水→火→金と、反発して相手を剋していく関係。「木剋土」でいえば、木は土の養分を吸い取って（土気を奪って）成長する。土にとってみれば、木は相性の悪い相手なわけだ。

この相生・相剋、単純にいえば相性の良し悪しが、暦の吉凶を導きだすのに重要な役割を果たしているのだ。



陰陽五行説の季節変化

以上が陰陽と五行のごく簡単な解説だが、この2つはやがて合流

し、陰陽五行説となっていった。この陰陽五行で季節の変化を説明すると、次のようになる。

この世の初め、宇宙は混沌状態だったが、やがてそこから、軽くて澄んだ暖かい気＝陽気が上昇して天となった。同時に、重く濁って寒い気＝陰気が下降して地となった。

この陰陽2気は、前述のようにかわるがわる消長盛衰を繰りかえし、一年の周期を形づくる。そして、その消長する間に、木火土金水という5つの活力ある物質を生じる。

この5物質もまた、一年を周期として消長盛衰し、そのために春夏秋冬の4季節が生じた。

- 春…木の芽が出る季節（陰陽が木を生じる）
- 夏…烈火のように暑い季節（陰陽が火を生じる）
- 秋…金属のようにひんやりする季節（陰陽が金を生じる）
- 冬…水も氷や雪になる季節（陰陽が水を生じる）

ここで土気がないことにお気づきだろう。陰陽がいつ土気を生じるかについては諸説があってはっきりしない。ただ現在の暦法では、春夏秋冬の末の5分の1（約18日）をとって、陰陽はこの期間に土を生じるとしている。暦の土用がそれに当たる。

十干十二支への配当

陰陽五行のほかに暦に見られる重要な要素、それがこの十干十二支だ。これは十干と十二支に分けられるが、もともとは日や月の順序を示すための符号（数詞）であったとされる。

ところが、これに陰陽五行が結合し、新たな性格が与えられることになる。十干の場合、まず、陽を兄（え）、陰を弟（と）とする。そのうえで十干に五行を配すると、次のようになる。

木の兄（陽）＝きのえ　甲
　弟（陰）＝きのと　乙
火の兄（陽）＝ひのえ　丙
　弟（陰）＝ひのと　丁
土の兄（陽）＝つちのえ　戊
　弟（陰）＝つちのと　己
金の兄（陽）＝かのえ　庚
　弟（陰）＝かのと　辛
水の兄（陽）＝みずのえ　壬
　弟（陰）＝みずのと　癸

十干十二支を干支ともいうが、これは十干の兄弟に由来するいい方なのだ。

さて、同じように十二支も、一年12か月を示す数詞だったが、陰陽五行が配され、次のように分けられた。

陽…子寅辰午申戌
陰…丑卯巳未酉亥
木…寅卯
火…巳午
土…丑辰未戌
金…申酉
水…子亥

なお、この十干十二支が組み合わされたものが六十干支である。

吉凶の簡単な判断法

以上が暦占に必要な基礎知識だ。これからどうやって吉凶を導きだすのか。ひとつだけ簡単な例を紹介しておこう。

付録の暦には、毎日の干支が記載されている。それを使って日の吉凶を占ってみる。

たとえば「甲午」の日は、どんなお日柄になるだろう。それを知るには、先の五行に当てはめてみればよい。すると、甲は木気で午は火気となる。つまり、「木生火」といういい関係となり、この日は万事が順調に進む吉日と判断できるわけだ。

このように、陰陽五行、十干十二支の仕組みを知るだけでも、暦の読み方がぐっと深くなる。ここではほんのさわりしか説明できなかったが、さらに深く掘り下げていけば、暦はまさに運命の宝鑑となるのである。